

黒潮のめぐみと共生する  
海のフィールドミュージアム 柏島

四国の西南端に位置する柏島は周囲3.9キロの小さな島ながら黒潮の影響を受け魚種に富み、日本で一二を争う豊かな海に囲まれる。この島で「持続可能な里海づくり」に取り組む神田優さんにお話を聞いた。

中学校の空き教室を借り受け  
「黒潮実感センター」を設立

ダイビングが大好きで学生時代から柏島の海に潜っていました。高知大学海洋生物教育研究センターにいた1996年、柏島にセンターの支所を設置することを文部省に提案しましたが実現しませんでした。そこで「大学がなくてもこの島の価値はかわらない」と思い直し、1998年にこの島に居を移して独力で活動をはじめました。中学校の空き教室を借り受けてスタートした組織を「黒潮実感センター設立準備委員会」と名づけ、まず島の価値を子どもたちに伝える活動（環境教育）からはじめました。

## 対立する利害のなかで

しかしながらセンターの設立活動に財政的な裏づけがある訳でもなく、ダイビングのガイドなどで生計を立ながらの活動でした。さらに漁場が荒らされたり密漁などがあり、漁業者とダイビング関係者との揉めごとも少なくありませんでした。地域のニーズは地域振興。それと環境保全をどう共存させるか、研究・教育・保全をキーワードに活性化につながる道を模索しました。

地元には様々な利害があり、誰もが総論賛成各論反対。目の前に現れる課題を地道にひとつずつ解決していきました。そして2002年にはNPO法人化し、ミッションを守り組織も維持しつつ公共性の高い仕事をやっていこうとあらためて志を固めました。

⇒神田さんが講師を務める  
「黒潮講座」はP15

アオリイカの産卵床づくりから  
つながりが生まれる

不振の漁業のなかで唯一高価に商われるアオリイカに注目しました。産卵する藻場が減って漁獲が落ちていたのです。そこでダイバーと漁業者が協働して人工産卵床を設置する事業をはじめました。産卵床になる柴（ウバメガシの枝）をつけた鉄の棒をダイバーが潜って海底に打ち込み設置します。初年度から見事に産卵数が増え、1産卵床あたり1万房もの卵のう（通常数百房）が産みつけられるようになりました。

さらに柴にスギなどの間伐材の枝葉を使うことで人工林が抱える問題にふれ、ダイバーと漁業者、山の子どもと海の子ども、林業と漁業というつながりが生まれていきました。

海洋生物の宝庫・  
柏島を「里海」に

柏島には温帯域で一二の規模を誇るサンゴ群集があり、透明度も高く、魚の種類は日本一の1000種を越えます。美しい海はいくらでもあります。どこも港から遠く、船でポイントまで移動します。でもここは人が暮らすすぐ目の前に美しい海が広がっているのです。人が海からの豊かな恵みを受取るだけでなく、人も海を耕し守る。人と海とが共存できる場が私たちの目指す「里海」です。

海の底がすぐそこに見えるクリアカヌーで、サンゴや藻場、魚たちを観察し、黒潮の恵みを実感してください。

※インタビューをもとに編集部で構成

神田 優  
Masaru Kanda

昭和41年高知市生まれ。子どもの頃から海好き、釣り好きで魚好き。高知大学農学部栽培漁業学科在学時は、釣りとダイビングガイド（高知県内・沖縄県座間味島）で生計を立てつつ学問に励む（総潜水時間6000時間以上）。東京大学海洋研究所で博士号取得。専門は魚類生態学。平成10年から柏島に移り住み、高知大学や高知医科大学非常勤講師を続けながら黒潮実感センターを設立、現在センター長

